

質問の解答例

各章にある問題の解答例を示します。

V1章 テ形音便 (98)

V2章 古語の時相－過去を中心に－ (102)

V3章 動詞の態拡張 (105)

本書での解答例作成は、内容の性質上、協力者の援助を得ずに、著者 1 人で行いました。

V1章 テ形音便

解答例

答V1-1

態拡張の前と後で分けて考える必要があります。(本書V3章参照)
 [態拡張のまえ] 動詞(語幹)は、飛ぶ tob-、咲く sak- のように、子音終わりでした。その子音は HeYaDe, WaTaKuSiGaMaNaBuRon で記憶しやすくなります。ただし、見る mi-、着る ki- のように、母音の i で終わる動詞(語幹)も 10 語ありました。(B8.3 ⑦)
 [態拡張のあと] 許容態詞の -e- と -i- (ともに -ur-, -Ø- 形あり) が語幹化したので、入れる ir;e-、起きる ok;i- のような、e と i の母音末動詞(語幹)が発生しました。また、態詞 -as- や -ar- の語幹化により、冷ます sam;as-、止まる tom;ar- のような子音末動詞(語幹)も増えました。
 現代語の動詞(語幹)末音は、i, e と、k, s, t, n, m, r, w, g, b です。子音は WaTaKuSiGaMaNaBuRon で記憶しやすくなります(p.2)。

答V1-2

生活が複雑になれば、概念も複雑化し、複合語が増え、自然に語や句が長くなります。一方、言語は日常の使用において使いやすいうほうがよいわけで、意味がきちんと伝わるのであれば、省略などで、発音を工夫しようということになります。平安時代のはじめごろにこの合理性が強まり、音便現象が生まれました。

答V1-3

テ形音便とは、子音末動詞(語幹)が後ろに別の動詞を続けるためにテを仲介させるときに生じる現象です。例: 聞く kik- → 聞いてみる
 [って] 立つ, 取る, 買う → 立って, 取って, 買って
 [んで] 死ぬ, 読む, 飛ぶ → 死んで, 読んで, 飛んで
 [その他] 書く, 泳ぐ, 貸す → 書いて, 泳いで, 貸して

答V1-4

たとえば、「やってみる yar-i=te-Øi=mi-ru」では「やりて」が「やって」と発音されています。きちんと「やりて」と発音すれば、r と t で舌先を口蓋と歯茎に1回ずつ接触させなければなりません、i を発音しない「やって」なら、接触は1回だけで済み、発音が楽になります。

拍数は「やりて」も「やって」も3拍です。意味は同じです。

テ形音便の原則とは、意味と拍数を保ちながら、開始基の -i の両側にある接触を1回で済ませることです。その分発音が楽になります。

答V1-5

私たちの行う呼吸は、「呼気(き)」と「吸気」で成り立っています。「呼気」は肺から出てくる空気、「吸気」は肺に取り込む空気です。「呼気」のうち、声帯を振動するのが「声」、振動しないのが「息」です。

答V1-6

「問ふ toh-」は規則どおりなら、「買ふ kah-」が「買って kat-Ø=te-」となるように「問って tot-Ø=te-」となるはずですが、しかし、多用される名詞形の「問ひ toh-i=Ø包」の影響を受けて、「問ひて toh-i=te-」（現代語で「問いて to(w)-i=te-」）となりました。また、「買ふ」の関西音便形の「買うて」と同形の「問うて tou-Ø=te-, too-Ø=te-」も生まれました。(本書p.7)

答V1-7

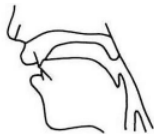
「あらふ(洗う) arah-」の古語の否定は「あらはず arah-azu」でした。この h は「ハ行点呼音」の現象で w になり、現代語では「あらわない araw-ana.k-」になりました。w の音は、「あらう araw-u / あらい araw-i」で発音されず、出沒性があるので、「洗う ara(w)-」と表記されます。

答V1-8

鼻音はナ行やマ行の音のように、声を鼻から出す音ですから、鼻をつまむと不自然です。(口音なら鼻をつまんでも発音できます。) 鼻音の n と m は声帯を振動させていますから、有声で、継続して発音することができます。…… n や m の鼻音を無声で発音するということは、声帯を振動させないで、息だけで発音することになりますから、音としては鼻を通る息の音しか聞こえません。内緒話にしか使いません。

答V1-9

基本的には、ナ行、マ行、鼻濁音のガ行の音が鼻音です。



←ここがついて
いれば口音



←ここが離れて
いれば鼻音

口音は呼吸が鼻を通らない音で、鼻音は呼吸が鼻を通る音です。

答V1-10

ガ行の口音は呼吸が鼻を通りませんが、鼻音は鼻を通ります。鼻音のほうは「鼻濁音」とよばれ、特別に「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」と表記します。

答V1-11

「貸して kas-i=te-」の -i の前の s は摩擦音なので接触はしていません。また、もともと -i は発音されていません。つまり、xxs-i=te の形式を持つものは、音便化しなくても音便化した発音になっています。

答V1-12

動詞(語幹)末母音は i か e で、両者とも 母音-Ø=t となります。
[i]……起きて oki-Ø=te-, 降りて ori-Ø=te-, 浴びて abi-Ø=te-
[e]……向けて muke-Ø=te-, 建てて tate-Ø=te-, 染めて some-Ø=te-
つまり、接触は t の1回だけなので、確かにテ形音便化しません。

答V1-13

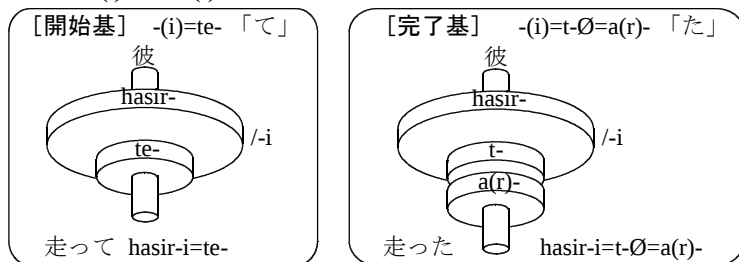
「泳ぐ oyog-」の g は、テ形音便を生じたところには鼻音だったので、「泳ぎて oyog-i=te-」の -i=te- も鼻音化し、t が有声音 d になりました。のちに鼻音の必要性がなくなり、口音の d になりました。(本書p.11)

答V1-14

「行く」は現代語では「ゆく yuk-」と「いく ik-」の2つの発音があります。この音便の生じたところには「ゆく yuk-」の u が省略されて yk- ができたはずですが(ik-の元の形です)。これのテ形は yk-i=te- です。「書きて kak-i=te-」は kak-i=te- になりましたが、同じようにすると yk-i=te-「いて」になり、動詞(語幹)として発音されるのは半母音 y だけで、拍数も2拍になってしまい、「ゆきて」の3拍を保てません。これを避けるために動詞(語幹) yk- 全体を発音しようとして「いって yt-Ø=te- (→ it-Ø=te-)」になったものと考えられます。(本書pp.10-11 参照)

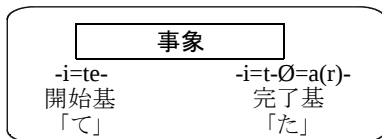
答V1-15

かなで表記すれば、「て」が開始基で、「た」が完了基です。構造で見れば、下左図の**開始基** <-(i)=te-> に動詞 ar- を続けたものが、下右図の**完了基** <-(i)=t-Ø=a(r)-> です。つまり、**完了基の前部が開始基**です。



開始基での =te- は、完了基では e が省略されて =t- になります。

時相図に示せば、次のようになります。



A4.5「テの歴史」も参照

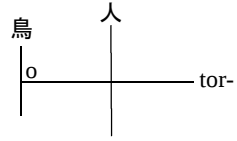
完了基「た」は「事象開始の完了」とみる場合には開始の意味も持ちます。

答V1-16

「歌いたい uta(w)-i=ta.k-i」の (w)-i=t の部分は、音の並びとしては「買った ka(w)-i=t-Ø=a-Ø」のような完了基形と似ています。しかし、この t は開始基の t ではありません。それで文法的な音便を生じず、「歌ったい」と音便化しないのです。

答V1-17

県名「鳥取」は古事記などから、「鳥を取る」ことの意味だと分かります。構造は右図のような「(人が)鳥を tor-」の
 はずです。ここから「とりとり tori=tor-i」の
 名称が生まれました。この名称の音の並び
 の中に ri=t があります。このため「ありて
ar-i=te」のテ形音便形「あつて at=te-」と同
 じようにして「とつとり tot=tor-i」が生まれました。(ri=t の t は開始
 基の t ではありませんので、これは文法的な音便化ではありません。)



答V1-18

「飲んで nom-i=te-」は撥音便、様式(1)です。「笑って warah-i=te-」は促
 音便、様式(1)です。「おはよう o-haya.k-u」はウ音便、様式(3)です。

答V1-19

構造の中に受影態の -ar- (尊敬)がある「なさる」「くださる」「おっしゃる」
 「いらっしゃる」(「泣く甥」と記憶)の4動詞。イマス音便とは、たと
 えば、「なさります nas-ar-i=mas-u」の下線部の r を省略する音便です。

答V1-20

〔イマス音便〕 nas-ar-i=mas-u 〔テ形音便〕 tor-i=te-Ø
 [同] どちらにも中止描写詞 -i (連用形)があり、その両側に子音があ
 ります。どちらも口腔内での接触を1回にすることをめざしています。
 [異] 「イマス音便」では、-i の前に尊敬を表す受影態詞 -(r)ar- の r があ
 り、その r を省略することで接触を m の1回だけにします。「テ形音便」
 では -i の前の 9 つの子音に応じて方式を変えて接触を1回にします。

答V1-21

「計ります hakar-i=mas-u」は「なさります nas-ar-i=mas-u」と同じ音の
 並び r-i=m を持っています。しかし、r の性質が異なります。「なさり
 ます」の r は、尊敬表現の受影態詞 -(r)ar- の r で、この r のときにイマ
 ス音便が起こります。「計ります」の中の r は動詞(語幹)「計る hakar-」の
 r です。それで、イマス音便が起こらないのです。

「撮ります tor-i=mas-u」, 「止まります tom;ar-i=mas-u」, 「あります
ar-i=mas-u」なども同じ理由でイマス音便が起こりません。

答V1-22

肺から出る空気「呼気」で「わたし、げんき、あつ」と言うのは私たち
 が日常ふつうに行う言語活動ですから、何ら問題ははありません。一方、
 肺に吸い込む空気「吸気」で語を発音することは困難です。息を吸い込
 みながら「わたし、げんき、あつ」と言ってみると大変さが分かります。

V2章 古語の時相—過去を中心に—

解答例

答V2-1 ふつうは次のようなことを指します。[]の中の数字はT1.4 参照。
「いま、彼は椅子に座っている。」時相は現在・結果状態継続中[44]。
「あす、彼は椅子に座っている。」時相は未来・結果状態継続中[04]。
実際には「昨日、彼は椅子に座っている。」[64]などもあり得ます。

答V2-2 まだ子どもは生まれていないので、ふつうは未来 50 です。しかし、
絶対に生まれると信じて疑わないなら修辭的に未来 100 です。

答V2-3 子どもはもう生まれているので、過去 100 です。

答V2-4 「つ」「ぬ」は、完了の局面③を表し、「り」「たり」は、結果状態継続中の局面④を表します。

答V2-5 「散らしつ」は散らしたことを完了として表現し、「散りぬ」は散ったあとに、ある状況が生じたことを表現するといえます。

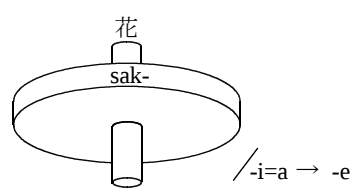
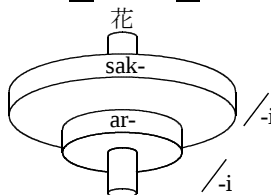
答V2-6 どちらも散らした後の状況に重点があり、表す局面は同じですが、「たり」は子音末動詞・母音末動詞の両方に使えます。これに対して、「り」は子音末動詞にしか使えず、不便なので、中世に消滅しました。

答V2-7 「読んだら」を形態素表示すれば、yom-i=t-Ø=ar-a(ba) です。「ら」は助動詞「ある」の古語の条件表現形 =ar-a(ba) の一部です。ひらがなの「ら」は取り出しやすいですが、これだけ取り出しても意味はありません。

答V2-8 「咲けり」は形態素表示では sak-i=ar-i で、この -i=a が変音して-e になりました(sak-er-i)。命令形の「咲け sak-e」は古語の命令形「咲き sak-i」に a が付いたもので、sak-i=a が元の音です。両方の e は、ia からできた同じ音ですが、下の構造図で見るとおり、「り」が命令構造に付いているわけではありません。(そもそも、「り」というものはありません。)

花咲けり sak-i=ar-i

〔命令形〕 花咲け sak-i=a

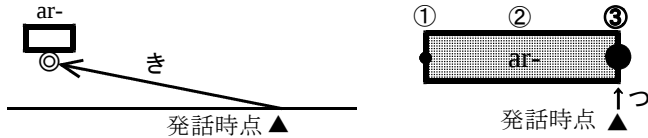


答V2-9

「つる」は「つ」(の連体形)なので動作の完了を表し,「たる」は「たり」(の連体形)なので動作のあとの状態を表します。つまり,「植ゑつる花」は「植え(終わっ)た花」,「植ゑたる花」は「植えてある花」です。

答V2-10

「し」は「き」(の連体形)なので「時」の過去を表し,「つる」は「つ」(の連体形)なので「相」の完了を表します。それで,「ありし人」は「(過去に)いた人」を,「ありつる人」は「(それまで/いままで)いた人」を表します。



答V2-11

「てき」は, [作動的動作の前指向完了]と[過去]の組合せですから,「(その時まで続いていた)意志的な動作をし終わった」となります。

「にき」は, [自然推移的事象の後指向完了]と[過去]の組合せですから,「自然推移が終わって, その結果状態が始まった」となります。

答V2-12

「つ」は「(相)の完了」を表し,「てき(て=つ)」は「完了が(時の)過去であった」ことを表しますから,「祈りつ」は,「祈りが終わった」ことを表し,「祈りてき」は,「過去に祈りが終わった」ことを表します。

答V2-13

「散りぬ」は「散ったあとの状態が始まったこと」を表し,「散りけり」は

- ・「散ったことに気づいて驚いたこと」
- ・「散ったことを比較的客観的に述べること」
- ・「散ったことを伝聞として述べること」

などを表します。

答V2-14

「き」は過去 100 (修辭過去 100 も)を表すので,「男ありき」は「男がいた」の意味です。「けり」は, 過去の確実性を問わない伝聞(など)を表すので,「男ありけり」は「男がいたようだ」(など)の意味です。

答V2-15

「てけり=te-Ø=k-i=ar-i」は,「つ(意図的行為の完了),き(過去),あり(結果状態存続)」の3つが構成要素です。気持ちとしては「した」,「してしまった」,「しておいてある」などを表しますので,「食ひてけり」は「食べてしまった」などの気持ちを表します。

答V2-16

「にけり=n-i=k-i=ar-i」は、「ぬ(自然的推移の完了), き(過去), あり(結果状態存続)」の3つが構成要素です。気持ちとしては「結果の状態がある(なあ)」ということを表しますので, 「わすらえにけり」は「わすれてしまったなあ」と感慨をこめて表現します。

答V2-17

時相の2桁表示法(T1.4)を用いて示します。(「た」は「=t-Ø=a(r)-」です。)

- ・ た[33] が「つ」と「ぬ」に対応。(前指向, 後指向の要素を除く。)
- ・ た[44'] が「り」と「たり」に対応。
- ・ た[4 ◎], た[6 ◎] などが「き」に対応。
- ・ た[63] ([43]) が「てき」に, た[43] ([63]) が「にき」に対応。
- ・ た[4 ◎] が「けり」に対応。
- ・ た[43] などが「てけり」, 「にけり」に対応。

現代語の「た」は以上のような形で古語の時相表現と対応しています。

答V2-18

国語文法で「仮定形」を「読め」とする理由は, 「ば」を加えれば「読めば」となって仮定を表すからです。しかし, 機能の点から見れば, 仮定は「読めば」のはずで, 単に「読め」では命令です。

なぜ機能と関係なく語を切るのでしょうか。……ひらがなを使っているから, 「よめ-ば」としか切れないからです。言語学的には yom-eba と分析すべきですが, ひらがなでは「よめ yome」という形でしか把握できず, -eba という形態素が正しく把握できないのです。…… また, 単に「ま, み, む, め, も」というひらがなの並び方に従わせるために非・言語学的な, **素朴な感覚**で, 語を切るためにこの現象が生じているとも言えます。

国語文法	本文法
「よ-ま」 未然形 →	yom-ana.k- 否定形
「よ-ま」 未然形 →	yom-as- 原因態形
「よ-ま」 未然形 →	yom-ar- 受影態形
「よ-も」 未然形 →	yom-oo 意志・推量形
「よ-め」 仮定形 →	yom-eba (仮定)条件形

次の国語文法の分析は, 同じ問題がありますが, 理解はできます。

「よ-み」 連用形	yom-i 中止形など
「よ-む」 終止形, 連体形	yom-u 基本(終止)形など
「よ-め」 命令形	yom-e 命令形

仮定形を「読め」とするのは, 国語学のひらがな文法がきちんと形態素を把握できないことに原因があります。

V3章 動詞の態拡張

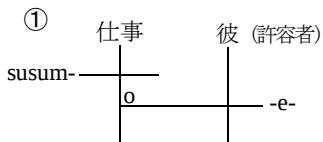
解答例

答V3-1

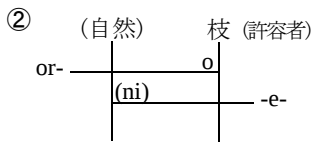
「許容態 -e-」には、次の①～④の使い方があります。

①他動 「彼は仕事を進める susum-e-」

②自然生起 「枝が折れる or-e-」



許容者は、「仕事が susum-」の原因者となっています。



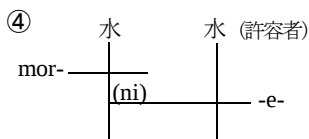
何が事象「枝を or-」をしたのかは不明。「枝」が許容者です。

③可能 「彼は中国語が話せる hanas-e-」

④自他補強 「水が漏れる mor-e-」(この場合は自動詞の補強)



許容者は、「彼が中国語を hanas-」ことを許容します。



自身に生起する事象「mor-」の原因者は対自許容の自身です。

答V3-2

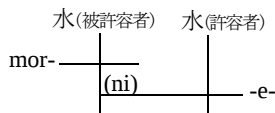
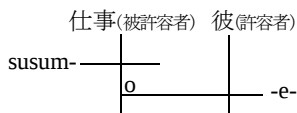
p.39 に見るように、「原因態 -as-」には、①直接他動、②指示他動、③結果招来、④不阻止 の4つの使い方がありますが、このうち使役といえるのは、②指示他動(指示して行わせる)だけです。ですから、「使役態」といわないのです。「原因態」といえば①～④を説明できます。

また、「受影態 -ar-」には、①受影、②自発、③可能、④尊敬 の4つがありますが、受動といえるのは、①受影の一部(動作主体の動作が、客体<-ar-の主体>をめあてとしている場合)だけです。ですから、「受動態」といわないのです。「受影態」といえば①～④を説明できます。

ただし、本文法でも、以前は「使役態」「受動態」としていました。

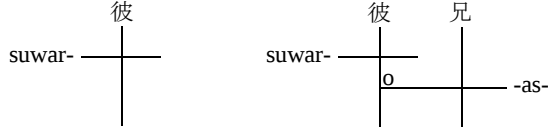
答V3-3

「対他許容」は、下左図のように被許容者と許容者が異なる許容態構造です。「対自許容」は、右図のように両者が同一の許容態構造です。

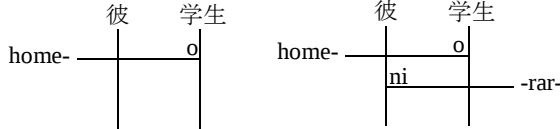


答V3-4

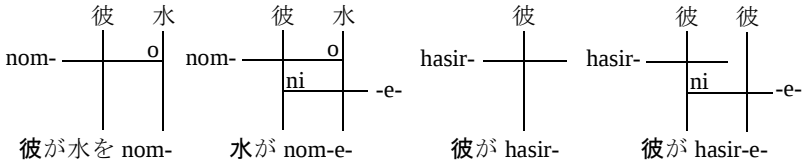
k⑩の場合、「彼が座る suwar-」(下左図)の主語は動作主体の「彼」です。この構造に -as- が付きますから、「兄が彼を suwar-as-」(下右図)のように動作主体は「彼」のままでも、主語が「兄」(原因主体)に変わります。



k⑪の場合も同じで、「彼が学生をほめる home-」では「彼」が主語です。-rar-が付いて「学生が彼に home-rar-」になると主語は「学生」になります。



k⑫ -e- の場合、他動詞「飲む nom-」では**対他許容**で、主語が変わります。自動詞「走る hasir-」では**対自許容**なので、主語は変わりません。



答V3-5

国語文法で「未然形」というのは、動詞の活用語尾といわれるものが、「のま(ない)」「のま ma」のように、母音が a になっているものです。「のまない nom_a-nai」「のます nom_a-su」「のまれる nom_a-reru」の3つがこの形を持ちます。国語文法ではこの「のま nom_a」を「未然形」といいます。

しかし、これらは形態素分析すれば、

「のまない nom-ana.k-i」(否定形)

「のます nom-as-u」(原因態形)

「のまれる nom-ar-e-ru」(受影-許容態形)

となり、そもそも「のま noma」という部分が出てきません。それで、本文法では「未然形」というものはない、と考えます。

また、国語文法で「仮定形」というのは、「のめ(ば)」「め me」のように母音が e になっているものです。しかし、形態素分析すれば、

「のめば nom-eba」(〈仮定〉条件形)

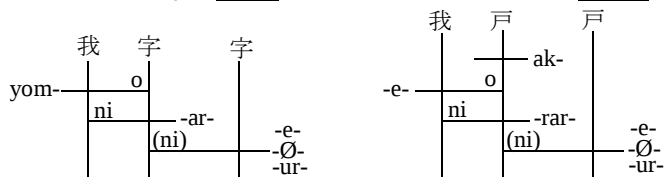
となり、「のめ nome」の部分が出てきません。それで、本文法では「のめ」という「仮定形」はない、と考えます。

本書p.93 参照

答V3-6

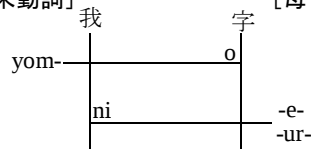
現代語では「読む yom-」のような子音末動詞には -e- が直接付いて「読める yom-e-」となり、**可能**の意味になります。ところが、「起きる oki-」のような母音末動詞は、「起きられる oki-rar-e-」となり、-e- は直接付きません。……これは、平安時代(～江戸時代)の**可能**の表現が -(r)ar-e- の態の基の形でなされていたことと関係があります。(初めは否定での使用が多かったのですが、ここでは肯定の構造で考えます。)

この態の基は当時、3つの形でした。-(r)ar;e- / -(r)ar;Ø- / -(r)ar;ur-
 [連用] 字01読まれ, yom-ar-e-Øi 戸01開けられ, ak;e-rar-e-Øi
 [終止] 字01読まる。 yom-ar-Ø-u 戸01開けらる。 ak;e-rar-Ø-u
 [連体] 読まるる字 yom-ar-ur-u 開けらるる戸 ak;e-rar-ur-u

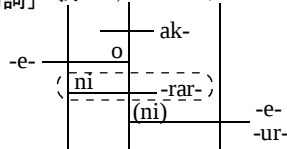


この態の基は中に受影態 -(r)ar- があり、**受身**の意味を持ちました。室町時代ごろに**可能**の意味だけにするためにこの態の基から -(r)ar- を抜こうとしました。…… yom-のような子音末動詞では yom-e-/yom-ur- のようにうまく抜けました(下左図)。一方、ak;e- のような母音末動詞では、古い日本語が忌避していた母音連続(ak;e-e-/ak;e-ur-)が起こるので、抜けませんでした(下右図)。この構造が現代語にまで続いていて、それで母音末動詞には直接 -e- が付かないのです。(-ur-は-e-に統合。)

[子音末動詞]



[母音末動詞]



なお、右の構造が保たれているため、無理に -ar- を抜いた形の「戸が開けれる ak;e-r(ar)-e-」とすると、目的は達せられますが、「あけ(ら)れる」と見なされ、**ラ抜き表現**といわれて非正規扱いとなります。

★「開け得る ak;e-Ø=Øo e-ru / ur-u」は似ていますが別のものです。

答V3-7

yabur;e-ru は yabur- が許容態 -e- によりT2方式(本書p.55)で態拡張して、自動詞の「破れる」になったものです。「紙を破る → 紙が破れる」

yabur-e-ru は他動詞「破る yabur-」が許容態 -e- により、**可能**の意味を持つようになったものです。「紙を破る → 紙が／を破れる」(Sp.55)

答V3-8

原動詞の「立つ tat-」が現代語の他動詞「建てる tat;e-」を生みました。奈良時代の動詞(語幹)は、連用形と命令形で「建て tat;ë-」で、連体形と已然形で「建つる tat;ur-」でした。終止形はまだ「建つ tat;Ø-」でした。平安時代に、連用形と命令形の ë が e になりました(「建て tat;e-」)。鎌倉時代に、終止形の語幹がやっと「建つる tat;ur-」の形になりました。江戸時代後期に、終止形、連体形の語幹も「建てる tat;e-」になり、已然形が消えたので、現代語と同じになりました。(本書p.54)

答V3-9

国語文法はひらがなで考えるので、「よむる」の構成要素に-ur-があるとは夢にも思いませんでした。認識はありませんでした。(yom-ur-u)

答V3-10

鎌倉時代に終止形の動詞(語幹)形が変わりました。江戸時代後期には終止形、連体形の動詞(語幹)形が変わり、已然形がなくなりました。

答V3-11

現代語の「開ける ak;e-」は、奈良時代には ak;ë-, ak;Ø-, ak;ur- という3つの動詞(語幹)の形がありました。

答V3-12

「抜く nuk-」の態拡張は、[T1]そのまま現代語、[T2]「抜ける nuk;e-」、[T4]「抜かる nuk;ar-」、[T6]「抜かす nuk;as-」の4方式がありました。

答V3-13

方式[2]の e は対他許容態ですが、方式[3]の e は対自許容態です。

答V3-14

方式[6]の as は対他原因態ですが、方式[9]の as は対自原因態です。

答V3-15

方式[7]の ase は対他原因基、方式[10]の ase は対自原因基です。

答V3-16

国語文法では、古語の活用表の「已然形」の部分を、現代語の活用表で「仮定形」にしています。

国語文法	古語活用表	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
		言	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
	現代語活用表	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
		言	わ	い	う	う	え	え

確かに、古語では「とは言へ」の「言へ」のように「已然形」という形が認められます。しかし、現代語では「言え」は命令形です。「仮定形」は「言え」ではなく、「言えば i(w)-eba」です。それで、本文法では、現代語を扱うときは、「已然形」はもちろん、「言え」という「仮定形」もないと考えます。(「未然形」ありません。) 本書p.93 参照。

答V3-17 「開く ak-」は、Z1 ではそのまま現代語の自動詞「開く ak-」になっています。Z2 では許容態の関わる態拡張をして、現代語の「開ける ak;e-」という他動詞になっています。

答V3-18 はい、たくさんあります。Z2, T2 の中の分かりやすい例だけでも次のものが挙げられます。これはほんの一例です。
 [Z2] 痛む, 浮かぶ, 絡む, 沈む, 育つ, 立つ, 付く, 続く, 並ぶ
 [T2] 売る, 切る, 砕く, 裂く, 知る, 釣る, 解く, 抜く, ひらく

答V3-19 「出づ id-」は奈良時代には「id;e-, id;Ø-, id;ur-」の3形語幹でした。この動詞は万葉集の時代から詞頭の i を消失する傾向があり、この消失は室町時代にかなり進み、江戸時代には「d;e-」になっていました。(許容態の ;Ø-, ;ur- は ;e- に統一されました。)

答V3-20 「水」という名詞を修飾していますので、どちらも連体形です。「流るる nagar;ur-u」は、奈良時代から江戸時代前期までの連体形で、「流れる nagar;e-ru」は、それ以降、現代までの連体形です。

答V3-21 はい。「含む hukum-」は「英語を含む, /含む3カ国語を話す」「英語を含みます」のように使い、「含める hukum;e-」は「英語を含め, 3カ国語を話す」「英語を含めます」のように使います。両者とも他動詞です。

答V3-22 「足りない tar-ana.k-i」が原自動詞で、「足りない tar;i-na.k-i」が態拡張した形ですが、否定形は両方とも同じように使えます。

答V3-23 Z3i では「生きる ik;i-」となります。意味は「生く ik-」と同じです。
 Z2 では「生ける ik;e-」となります。こちらは「生かす」の意味で、「花などを水を入れた器に入れる」や、「野菜や炭火を土や灰に埋める」ことをさします。

答V3-24 tod;i- のかな表記は「とぢ」で、toz;i- のかな表記は「とじ」です。室町時代ごろに、ヂとジ、ヅとズの違いがなごとの混同が起り、地方により、環境によりさまざまな様相を呈しました。この問いに関する限りでは、動詞末の子音(ヂの子音)[dʒ](破擦音)から、頭の[d](破裂音)を除いて、ジの子音[ʒ](摩擦音)だけにして、発音を楽にしたことを意味します。

答V3-25

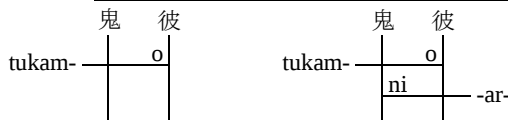
古語では、「舞ふ mah-」は「平面上を旋回運動する」でした。受影態 -ar- が加わり、mah- の影響を同一主体が受けて「まわる mah;ar-」になると、「平面上を旋回する」になり、旋回が中心になりました。

答V3-26

「はっきり区別する、違いを識別する」という意味でした。

答V3-27

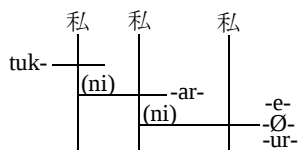
「彼が鬼につかまる tukam-ar-」は「鬼が彼をつかむ tukam-」の構造がもとになっています。ふつう、他動詞には -ar- は対他で機能します。



しかし、「彼がつり草につかまる」のもとの構造は「つり草が彼をつかむ」ではないでしょうから、本書p.61 の下の図(「馬」になっていますが)のように -ar- が対他ではなく対自で機能していると考えられます。この点で特殊と考えられます。そのページにある「またがる」「くるま」も他動詞において、-ar- が対自で機能していると考えられます。

答V3-28

「疲れる tuk;ar;e-」の tuk- は「尽く tuk- (力などが)消耗し果てる」であると考えられますので、「私は疲れる tuk;ar;e-」の構造は右図のようになります。対自受影・許容です。

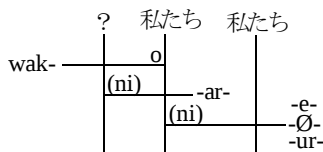


答V3-29

受動の例は「彼はいま部長に呼ばれている yob-ar-e-」で、「呼ぶ行為」が具体的に存在することに重点があり、T5 の自動詞の例は「彼女は天使と呼ばれている yob;ar;e-」で、「呼ぶ行為の存在」よりも「呼ばれる内容」のほうに重点があります。

答V3-30

「わく wak-」のこの場合の意味は「別々にする」ですが、この主体が何であるかは分かりません。「運命」でしょうか。しかし、日本語ではこれが分からなくても問題はありません。



私たちの、(は)別れ

答V3-31

「消ゆ kiy-」に -as- が付けば, 「消やす kiy-as-」になるはずですが, 実際は「消す kes-」とっています。これは iy-a の部分が e の音に変わったためです。構造はp.64 の図と同じです。

答V3-32

このT6 の -as- は対他で, -as- の主体が他者の行為等の原因者となります。T9 では -as- は対自で, -as- の主体が自分の行為の原因者となって, 敬語と非敬語の動詞を作ります。

答V3-33

他動詞の例は「財布から 1 万円札を覗かせる nozok;as;e-」です。原因基の例は「彼は息子に小屋の中を覗かせる nozok-as-e-」です。

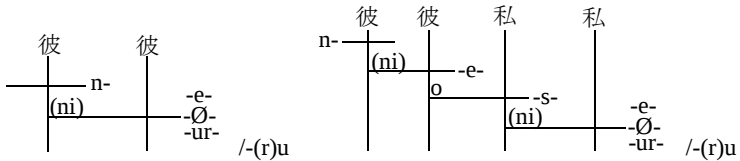
答V3-34

他動詞の例は「念のため 1 万円札を持たせた mot;as;e-」です。原因基の例は「疲れたので, 鞆も息子に持たせた mot-as-e-」です。

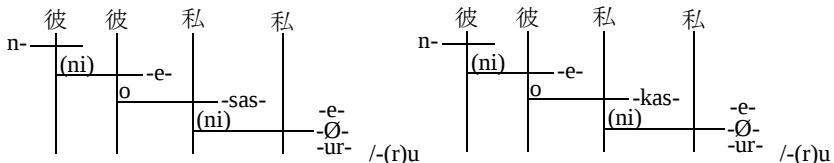
答V3-35

動詞「ぬ(寝 n-)」の意味は「眠る, 体を横たえる, 伏す」です。この動詞は n-, n;e-, n;ur- の3つの形(で語幹)を持っていました(下左図)。現代語では「寝る n;e-」という1つの形の動詞(語幹)になっています。

「寝せる n;e;s-e-」は, 意味では直接他動(S3.3)が中心です。古語では3形語幹で, 現代語では1形語幹になっています(n;e;s-e-下右図)。



「寝さす n;e-sas-」「寝させる n;e-sas-e-」は, 動詞「寝る n;e-」に原因態・基が付いたものです(下左図)。直接他動・指示他動・結果招来・不阻止の意味を持ちます(S3.3)。



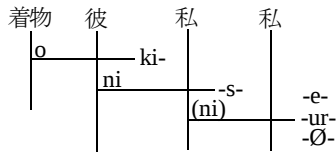
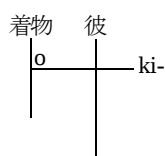
なお, 「寝かす n;e-kas-」「寝かせる n;e-kas-e-」は, -sas- の部分に口語的な -kas- が代入されたものです(上右図)。

また, 上代には「寝」という名詞がありました。

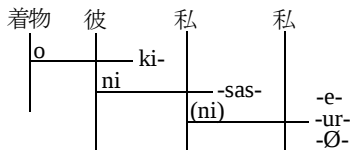
朝寝(あさい), 味寝(うまい), 安寝(やすい), 寝目(いめ)→夢

答V3-36

「彼は着物を着る ki-」の構造は下左図で、「着せる ki-s-e-」の構造は下右図です。「させる」の意味は直接他動が中心です(S3.3)。

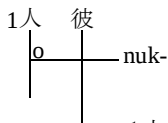


「着させる ki-sas-e-」の構造は右図のようになります。意味は直接他動・指示他動・結果招来・不阻止です(S3.3)

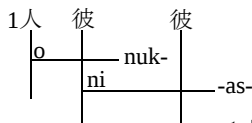


答V3-37

構造の違いは下図のとおりです。「抜かして」のほうは対自原因なので、「(無意識のうちに)自分にそうさせた」という気持ちが表現のうえに表れています。



1人抜いて



1人抜かして

答V3-38

[鎌倉時代] ①では, ak;Ø- の形が ak;ur- になり, Ø 形が消滅しました。
②でも, ok;Ø- の形が ok;ur- になり, Ø 形が消滅しました。
[江戸時代] ①では, ak;ur- の形が ak;e- になり, ur 形が消滅しました。
②でも, ok;ur- の形が ok;i- になり, ur 形が消滅しました。

答V3-39

子音末動詞の「活用表」で、語尾がア段、イ段、ウ段、エ段の4つのかなをとっていた「四段活用」に、「のもう」というオ段のかなが加わったので「五段活用」とよばれるようになりました。それだけのことで、動詞(語幹)が変化したわけではありません。国語文法の活用表は動詞の機能を整理したものではなく、「語尾」をかなの順序で並べたものです。

	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然/仮定	命令形
四段活用	のむ	の	ーま	ーみ	ーむ	ーむ	ーめ	ーめ
五段活用			ーま ーも	ーみ ーん	ーむ	ーむ	ーめ	ーめ
	nom-u	nom-	-as-u -oo	-i	-u	-u	-e -eba	-e

答V3-40

子音末の動詞では、もともと終止形(yom-u)と連体形(yom-u)が同じでした。ところが、態拡張で許容態を語幹に取り込んだ動詞は当時はまだ終止形(kudak-u)と連体形(kudak;ur-u)とが異なっていました。

「係り結び」は倒置の現象に由来し、主文の述語の終止形を連体形にするという結果を生みました。これは動詞にとって、終止形を連体形と同じ形にする絶好の機会となりました。……「係り結び」のおかげで、態拡張した動詞の終止形(kudak-u)が連体形と同じ形(kudak;ur-u)になり、日本語の特質どおりに動詞を使用することができるようになりました。

答V3-41

許容態が語幹化したのち、語幹が統一したことを簡単に表にすれば、次のようになります。

〔許容態の語幹化と形の統一〕

許容態語幹 / 活用形		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推定	ë 語幹発生	砕け kudak;ë-Ø	砕く kudak-u	砕く kudak-u	砕け kudak-e	砕けよ kudak;ë-yō
		語幹2種類 kudak;ë- (許容態形) と kudak-				
	ur 語幹発生	砕け kudak;ë-Ø	砕く kudak-u	砕くる kudak;ur-u	砕くれ kudak;ur-e	砕けよ kudak;ë-yō
		語幹3種類 kudak;ë- (許容態形) と kudak;ur- (許容態形) と kudak-				
	終止形も ur 語幹化	砕け kudak;e-Ø	砕くる kudak;ur-u	砕くる kudak;ur-u	砕くれ kudak;ur-e	砕けよ kudak;e-yo
		語幹2種類 kudak;e- (許容態形) と kudak;ur- (許容態形)				
	e 語幹に統一	砕け kudak;e-Ø	砕ける kudak;e-ru	砕ける kudak;e-ru	(なし)	砕ける kudak;e-ro
		語幹1種類 kudak;e- (許容態形)				

答V3-42

現代語の正格活用の動詞(語幹)は「読む yom-」や「開ける ak;e-」のように1つの形しか持ちません。しかし、「する」という動詞(語幹)は、本書p.84の表のように、現代語でも s-, si-, s;ur- の3つの形があります。それで変格活用になっています。

答V3-43

同様に「来る」という動詞(語幹)は、本書p.85の表のように、k-, ko-, k;ur- の3つの形があります。それで、変格活用の動詞となっています。

答V3-44

動詞「死ぬ」は、許容態の sin;e- という形を持たずに、終止・連体・已然形で許容態 sin;ur- を持っていました。つまり、古語では動詞(語幹)が sin-, sin;ur- の2形でしたので変格活用でした。現代語では語幹が sin- の1つになっているので、正格(五段)活用です。

答V3-45 「あり ar-」は方式[Z1]で、動詞(語幹)は変化しません。終止形の描写詞が鎌倉・室町時代まで他の動詞と異なり、-i だったので、古語では変格活用でした。それ以降は -u になり、正格活用となりました。

答V3-46 動詞「ある ar-」の否定形は「あらない ar-ana.k-」です。しかし、反対語の「ない na.k-」という形容詞は短く、意味が同じです。それで、否定形のかわりに、反対語を使うようになりました。

答V3-47 「たべる tab;e-」は動詞「賜ふ tab-」(目下の者に物を与える)が許容態-e-により態拡張して、「いただく」という意味の謙譲語になったものです。それで、食べ物に限らず、飲み物などにも使えたわけです。

答V3-48 「たべる tab;e-ru」の終止形は、平安時代は「たぶ tab;Ø-u」, 鎌倉〜江戸前期は「たぶる tab;ur-u」でした。

答V3-49 「触る hur-」という動詞は、触れる対象を ni 格で表示しました。現代語でも、「*作品を触れる」とは言わずに、「作品に触れる」と言います。一方、動詞「触る hur-」は許容態 -e- で態拡張しました(hur-e-)。触れる〈道具類〉のほうを -e- の対他と対自で表示することになったので、対他では「手を」になり、対自では「手が」になったわけです。p.89 図参照。

答V3-50 「言いふらす」は形態素で表示すれば i(w)-i=hur;as-u となります。「ふらす」の部分は hur;as-u なので、動詞「触る hur-」に原因態が関わっていることが分かります。つまり、-as- の主体が「触れることの原因者」であり、その主体が(人をうわさに)「触れさせる」わけです。p.89 図参照。

答V3-51 「山が見える」と「目が見える」の元の格関係は「目 de 山 o 見る」です(下左図)。「山が見える」では許容態は o 格の「山」が主体です(下中央図)。「目が見える」では許容態は de 格の「目」が主体です(下右図)(この時、ふつつ「山・彼」は描写しません)。このように、両者の構造は異なります。(現代語で考えていますので、p.90 の-y-の要素はありません。)

目	彼	山	目	彼	山	目	彼	山
de		o	de		o	de		o
		mi-			mi-			mi-
				ni			ni	
					-e	-e		

答V3-52

国語文法では語幹が「か」の動詞は 12 あります(いわゆる可能動詞を含めればそれ以上)。これは、日本語の「(かな)語幹」は動詞を特定する役に立たない、という、言語学では考えられない大きな欠点を示しています。この「語幹」は堂々と国語辞書にも示されています。(国語学という動詞語幹は、ひらがな表記での不変部分のことで、非言語学的。)

か・く (書く), か・す (貸す), か・つ (勝つ), か・む (噛む),
か・る (刈る), か・う (買う), か・ぐ (嗅ぐ), か・りる (借りる),
か・える (変える), か・ける (掛ける), か・ねる (兼ねる),
か・れる (枯れる) ……国語文法では、みんな語幹は「か」です。

答V3-53

ローマ字で示せば、言語学の常識どおり語幹で動詞を特定できます。
kas- 貸す, kat- 勝つ, kari- (kar;i-) 借りる, kare- (kar;e-) 枯れる
これは、前問の「〈か〉が語幹の動詞」のうちの4例のみですが、他の例でも同じです。辞書に載せるのは、この語幹であるべきです。

答V3-54

p.93 の国語文法の活用表のように、連用形の枠の中に「ん」がある理由は、「のむ」のテ形「のみて nom-i=te-」の音便形が「のんで non-Ø=de-」と発音されるからです。「のみ nom-i」が連用形なので、「のん non-Ø」の「ん」がこの連用形の枠に収められています。

答V3-55

つまりテ形音便形がないように見える動詞ですから、s を動詞末とする動詞です。「貸す kas-」「写す utus-」「外す hazus-」などです(本書p.12)。「行く(ゆく) yuk-u」もテ形音便形がありませんので該当します。

答V3-56

現代語の「取られる tor-ar-e-ru」は次のようになっていました。

	奈良時代		室町時代		現代	
詞基幹	とられ	tor-ar-e-	とられ	tor-ar-e-	とられ	tor-ar-e-
連用形	とられ	tor-ar-e-Ø	とられ	tor-ar-e-Ø	とられ	tor-ar-e-Ø
終止形	とらる	tor-ar-Ø-u	とらるる	tor-ar-ur-u	とられる	tor-ar-e-ru
連体形	とらるる	tor-ar-ur-u	とらるる	tor-ar-ur-u	とられる	tor-ar-e-ru
已然形	とらるれ	tor-ar-ur-e	とらるれ	tor-ar-ur-e	-	-
命令形	とられよ	tor-ar-e-yo	とられよ	tor-ar-e-yo	とられろ	tor-ar-e-ro

答V3-57

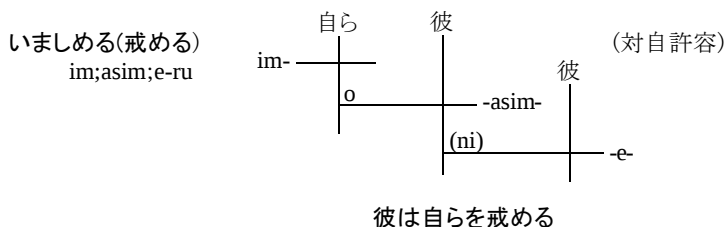
「れる・られる」は、態の基の -(r)ar-e- のことで、同じものです。
子音末の動詞に付くときは (r) が発音されません。yak-ar-e-ru (れる)
母音末の動詞に付くときは (r) が発音されます。mi-rar-e-ru (られる)
国語文法で「れる・られる」と表記したのは、国語学が形態素を正確に捉えられなかったからです。(国語文法では ya-ka が未然形です。)

答V3-58

「泣かゆ nak-ay-u」を例に取れば、ひらがなでは「なか・ゆ」としか分析できないので、「なか」を「なく」の未然形とし、「ゆ」を助動詞としました。形態素が適切に分析できないので、「ゆ」としています。

答V3-59

「いましめる(戒める)」は、「忌む」(言葉や行為を慎む)という動詞が先頭にあるので、im;asim;e-ru と形態素分析できます。-(a)sim;Ø- は中に入っています。……「自らを戒める」の構造は次のようになります。



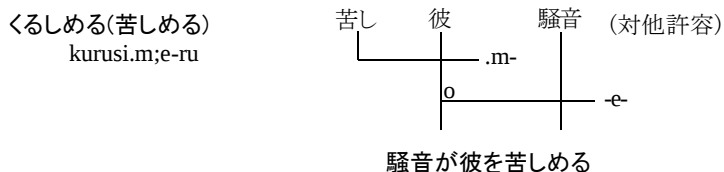
答V3-60

「いましめる(戒める)」については上述のとおりです。

「くるしめる(苦しめる)」は形容詞「苦しい」の形容実詞「苦し」が動辞 .m- によって動詞になり、さらに許容態の -e- で他動詞になったものです。形態素で表示すれば、kurusi.m;e-ru となります。

「騒音が彼を苦しめる」の構造は下図のようになります。

つまり、構造は「いましめる」と異なっています。



かな表示では、「くるしめる」と「いましめる」の違いは分かりにくいですが、構造で見れば、違いがよく分かります。

番外質問 現代語「育てる」の奈良時代の終止形を教えてください。本書p.54 参照。

→ 「育つ」です。それで、「子(を)育つ。」ということになります。

では、奈良時代、終止形の「育つ」は、自動詞・他動詞共通でしたか。

→ はい、奈良・平安はそうでした。現代語では自動詞の終止形は「育つ」で、他動詞の終止形は「育てる」です。理由は本書p.48 で。